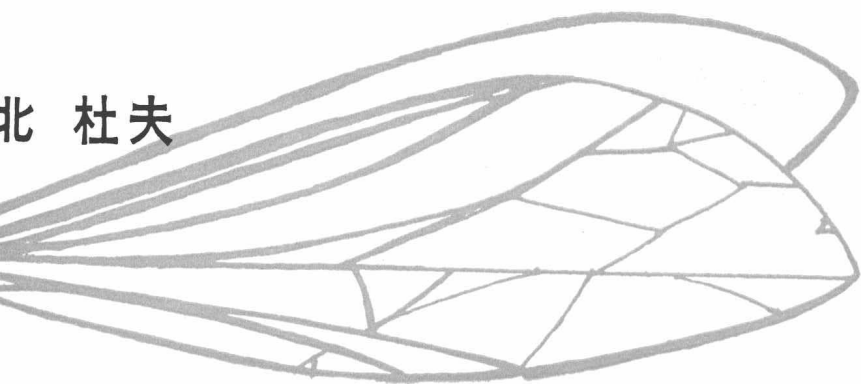




北 杜夫・羽蟻のいる丘

北 杜 夫



羽蟻のいる丘

一九六〇年十月二十日 発行

定価 二八〇円

著者 北^{きた} 杜^{もり} 夫^お

発行者 車^{くるま} 谷^や 弘^{ひろ}

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

本文印刷 精興社
色刷 凸版印刷
製本 福神製本

目次

羽蟻のいる丘	5
河口にて	25
人工の星	47
薄明るい場所	129
異形	169
星のない街路	199
谿間にて	231

装
幀
島
内
き
み

小説集

羽蟻の
いる丘

羽
蟻
の
い
る
丘

黒土の匂いと草の芽の匂いと、それらとごっちゃになった陽光の匂いがした。その匂いを嗅ぐみたいな恰好で、蟻たちは細い触角をうごかした。目立って大きな羽の生えた蟻、いくぶん小さな羽のある蟻、それから羽のない無数の蟻たちも。

女の子は、丘の斜面に顔をつけるようにして、両手を芝と土の上についたまま、おびただしい蟻の群を眺めていた。こんなに沢山の蟻、群がってひしめいている蟻、しかも羽のある蟻などを、これまでに見たことがなかった。彼女はやっと三度目の誕生日を過ぎたばかりだった。だが、蟻という名前だけは知っていて、さっきから口に出して繰返していた。「アリ、アリ、アリ、アリ」あたりは静かで、ただこの丘のむこうにある遊園地の方角から、かすかに子供たちの騒ぐ声が伝わってきた。それはけだるい大気の中に消えいりそうになりながらふしぎに明瞭に感じとれる

もの音、草ずれとはまた別のざわめきであった。どうして自分はあそこへ行けないのだろう。女の子はもう長いことほっておかれていて、触角をふっている蟻をかぞえるのにもあきあきしていた。「アリ、アリ、アリ、アリ」

すると、その息がかかったのか、一番大きな羽のある蟻が彼女のほうに頭をむけた。その冷い、こわばった、無表情な蟻の顔が、いくらか彼女を不安にした。女の子はすこし頭をずらし、助けを求めるように、単調な幼児の声で母親に呼びかけた。

「ママ、アリってこわいの？」

返事がないので、髪につけたピンク色の大きなリボンを片手でおさえながら、うしろの方に首をねじむけた。数米はなれた場所に母親が腰をおろしている筈だったし、また実際そこにいた。が、女の子は上半身を起し、もう一度その姿を見なおした。顔は知ってはいるが口をきいたことのないよその女の人、なんだか母親はそんな風に見えた。なじみのない、こわばった表情をし、じっと一箇所を見つめていた。すぐ横に同じように足を投げだしている男も、似たような顔つきをしていた。女の子はその男が嫌いだった。色の黒いのも、額の広いのも、髪がもじゃもじゃとたれているところも気に入らなかったが、なによりも自分に優しくしてくれないのが不服だった。実際、こんな男に女の子はそれまで会ったことがなかった。甘やかされて育った彼女は、この世の大人たちは自分を笑顔でむかえてくれ、大仰に頭を撫でてくれるものと信じこんでいた。とこ

ろが、その男ときたらさきほど初めて出会ったときも、広い額に皺をよせて言葉ひとつかけてくれなかった。彼女にはそれが不可解だった。それにしても母親まで——なるほどママはそこに坐っていた。だが、ふしぎなほど小さく見え、まるで顔しか知らぬどこかの女の人のように思えた。女の子は呼んだ。大人の注意をひくための、殊さら何も知らなげな声で。「ママ、アリって怖い？」

「こわくはないことよ」と女はこたえ、それから慌てて笑顔をうかべた。

「沢山、沢山いるの」

「蟻さんは、お引越をしてるんでしょう」

「おしっこし？」と女の子はまわらぬ舌で云った。彼女にはその意味がわからなかった。で、再び、丘の斜面を這ってゆく蟻の群に顔をつけるようにして繰返した。「おいっこし。おいっこし」

「あの子、かわいい？」と女は、子供から目を離し、その視線を下の芝地にすえて云った。

「うん」と男はうなずいた。本当のところ、彼はまだその女の子の顔さえよく見てはいなかった。が、彼はもう一度云い足した。「うん」

「可愛いでしょう？」ふたたび女は云った。半ば反射的で半ば自分に強いるかのようだった。

自己の所有物に対するこうしたあけすけな讃辞を聞いて、男は一寸あきたように女を見やった。しかし、苦渋とも歓びともつかない色が、その細められた目元に皺をよせているのを見て、すぐ

目をそらした。彼には、女というものがうらやましかった。

「あたしね」と女が云った。「あなたにあの子をお見せしたくなかったの。でも、やっぱりお目にかけてよかったと思うわ」

「そりゃそうさ」と男が云った。彼は足元の丈の長い草を片手でひきよせていた。ちぎろうとするでもなく。

しばらくの間、沈黙があった。日が照り、土と草の匂いがたちのぼり、二人は思い思いの考えを反芻した。

「ねえ」と女が云った。

「なんだい」と男が云った。

「あたし、わからないわ」と女がつぶやいた。

「俺だってわからない」と男が云った。

「あたしには比べることはできないわ。あなたとあの子と」

「そりゃそうさ」

「そうじゃないのよ。なんて云ったらいいか……」

「わかっているよ」と男が云った。「こっちにも、蟻がきた」

「そうね、蟻ね」と女は云って、足をすこしどけ、乾いた地面を這ってゆく蟻の群を見た。「な

んなの、これ。一体どうした訳？」

「どうした訳かわからんね。多分、引越でもするんだらう」

「あれは女王蟻ね」

「そうだ、大方そんなところだ」

「あれは移住をして、巣をつくるのよ、別なところに」

男は聞いていないらしく、首だけで返事をした。

「一昨日、蟻の映画を見たわ」かまわずに女は云った。彼女は一昨日をおとついと発音した。

「あのね、放射能で、蟻が大きくなる映画なの」

「そんなのがあったね。筋は知ってる」と男は、彼等の問題から離れた事柄になると女の口調が子供っぽくなるのを意識しながら言った。「君の好きそうでもない映画だし、あんなのを喜ぶ男を俺は知ってるよ」

「おかしな人ね」女は、ごく自然に、男の手の上に自分の手をのせた。

男は、なじみぶかい、いくらか汗ばんだ小さな手の上に、もう一方の自分の手を重ねながら、前をむいて云った。「どうだった、その蟻は？」

「途中で出ちゃったの。大蟻っていやらしいほど巨きいのよ。それが気味のわるい声をだすの、キイキイって……」

男は、大きくえぐられたボートネックのワンピースからのぞいている女の鎖骨の隆起と、そのほそい喉首とを見た。それから、キイキイというときに現われたその子供っぽい微細な表情の変化とを。すると、どんなにこの女が若く、頼りなげで、なにひとつ自分一人ではできないにちがいないということが更めて理解できた。こんな小きく、こんなに脆そうで、こんな若い女が子供を生むことが間違いないのだ、と男は思った。おまけにもう子供のできない身体になってしまったことも理不尽だった。男は訳もなく彼女の夫を憎んでみたが、およそ場違いの憎しみであることは彼にもわかっていた。

「あたし、あんな大きな蟻がでてきたらいいと思うわ」と、女はつづけた。「そして、あたしも、あの子も、みんな食べられちゃったらいと思うの。……でも、きつとこわいわね」

「そりゃ怖いだろうさ」と男が云った。

「あたし、逃げてもいいかしら」

「そんなこと俺は知らんよ」と、不愛想に男が云った。

またしばらくの間、沈黙があった。日が照り、幾秒か風が草をそよがせ、蟻の列は足元を去った。

「暑くないかな」と、男が云った。

「大丈夫」女は目かげをして、晴れておおいかなぶさるような空を見た。白い雲が二つ三つ、空の

中ほどに散らばっていたが、あってもなくてもいいような雲だった。

「あの子のことをいつているのだよ」

「そう？」女は男を見て、それから子供の方へ目をやった。「でもあそこは日かげだから。……あなたはやさしいのね」

「そうかね」

「ときたまね」

男は女を見て、一寸わらい、そして、どこかへ行ってしまった蟻の列を探した。

「あたし、わからないわ」と、女がつぶやいた。

「わからないことはないさ」と男は云って、むこうにしゃがんでいる女の子を見た。ちいさな丸っこい身体と、彼女自身をひとつの玩具みたいに見せている大きなリボンとを見た。しかし女の子は、ひとりの人間で、なにか真剣に地面を見ていて、もとより玩具なんぞではなかった。

「あの子？」女は男の視線をたどって、云った。なんだか自分に縁のないものに對するような口調だったし、それが自分でもこわかった。傍らから、へんにだるそうな男の声が云った。

「お前、あの子の前で、俺に抱きつけるかい？」

彼は、相手がどんな表情をするか見る気にもなれなかった。で、もっとだるそうな声で云った。
「わからなくても、決まっているんだ」

「そうね」と女は口早に云った。「そうなって、それであたしはお終いだわ」

男はおし黙った。女は、何にも云ってくれない男がうらめしかったが、それ以上話したところでどうなるということではなかった。何十度くりかえしたところで無駄なことだった。夫はあの子を放しはしないし、彼女も子供を捨てることはできなかった。女は目をつぶった。すると三年前、あの小さな肉塊が彼女に与えた焼けつくような痛みがよみがえってきた。ぼんやりと女は云った。

「あたしって、母親なのね」

「君は母親さ」鸚鵡がえしに男が云った。

「あたしは母親よ。でも、いつも母親でいなくちゃいけないの？　あたしって、もっと赤ん坊なのよ」

「君は赤ん坊だよ」

「もちろん赤ん坊じゃないわ。でも、まだやっぱり女でもいたってことを考えるのはいけないことかしら」

「君は女さ」と男が云った。あと二十年は充分美しい」

女はそっぽをむき、口をひらきかけ、それから氣をとりなおして相手の手に自分の手を重ね、しずかに関節の上を撫でた。骨がかたく、自分の指がやわらかいのが感じられた。